

平成 23 年度国立大学図書館協会海外派遣事業参加報告書

東北大学附属図書館情報管理課受入係

村上 康子

このたび、平成 23 年度国立大学図書館協会海外派遣事業により、米国の大学図書館を訪問の上、調査研究を行ったので以下のとおり報告する。なお、本調査研究は、福島大学附属図書館の芦原ひろみ氏と共同で行った。

1. 調査研究テーマ

「米国大学図書館におけるリスクマネジメントについて

～ 自然災害、犯罪、テロ、戦争、原発事故（放射能汚染）への対応策 ～」

2. 訪問期間 平成 23 年 11 月 17 日（木） ～ 平成 23 年 11 月 24 日（木）

3. 調査研究内容

米国大学図書館におけるリスクマネジメントについて、1) 自然災害、2) 人的災害、3) 犯罪等への対応策全般を始め、危機管理マニュアル、各種対応設備、館内体制等を視察・調査した。また、東日本大震災の経験を踏まえた自館の図書館復旧作業について、事前にレポートを送付し、訪問先にてプレゼンテーションを行い、より具体的な災害対策について意見交換を行った。

4. 調査研究の成果

9. 11 テロ以降、米国各図書館のリスクマネジメントは急速に進み、各館が位置する環境によって、危機管理体制、マニュアル、対応設備、人員配置、復旧プログラムに様々な配慮がなされてきた。9. 11 テロを経験したニューヨークのコロンビア大学、災害の比較的少ないペンシルバニア大学、周辺に小規模機関が集結するシモンズ大学、大洪水を経験したボストン公共図書館、巨大な組織を持つケンブリッジ地区のハーバード大学等、そのリスクマネジメントの完璧さに日本の大学図書館との大きな差異を感じる結果となった。意見交換で得た様々な情報、収集した資料等は、今後、日本の大学図書館におけるリスクマネジメント計画に非常に有意義なヒントになると思われる。その他、訪問先へは、事前に東日本大震災に関わる資料とレポートを提出し、現地（ペンシルバニア大学、シモンズ大学、ハーバード大学）でプレゼンテーションを行い、東北大学附属図書館及び福島大学附属図書館の状況を伝える機会を得ることもできた。

当初は、3 機関の訪問としていたが、ご同行いただいた柳澤輝行教授（東北大学附属図書館副館長）や坂口和子氏（ハーバード大学ライシャワー日本研究所）、野口幸生氏（コロンビア大学 C.V. スター東アジア図書館）のご尽力により、複数の図書館及び図書館以外の各災害対策関係者との会談が可能となり、非常に内容の濃い充実した調査を行うことができた。（5. 訪問先と調査結果概要*1, *2 参照）

以下、各機関の調査概要を報告する。詳細については、「大学図書館研究」へ投稿予定である。

5. 訪問先と調査結果概要

- 2011.11.18 AM10:00 Columbia University Libraries / Sachie Noguchi, Alexis Hagadorn, Vasare Rastonis

- 1) 災害発生時の確実な連絡網体制とドリル
- 2) 組織的な資料の災害復旧トレーニング（主に水濡れ・カビへの対処）と担当職員の健康管理
- 3) 貴重図書共同保存「Re-Cap」への参加、所蔵資料への保険

PM14:00 Columbia University Department of Public Safety / James F. McShane (Vice President)

- 1) 9.11 テロ以降、ニューヨーク警察からマックシェーン氏を配属し、連携体制を構築
- 2) 災害発生時混乱期の正確な情報伝達と誤報の予防対策、「1 Voice=スポークスマンは1人のみ」
- 3) すべての災害、犯罪、緊急時への対応（ハーレムに近いことも理由、保護者へ大学の安全性をアピール）

• **2011.11.19 AM10:00 University of Pennsylvania(*1) / Ian Bogus(MacDonald Curator of Preservation), Barbara Bernoff Cavanaugh (Director, Biomedical Library)**

- 1) 大学独自の災害対策を構築、周辺地域との連携は未定
- 2) NN/LM (National Network of Libraries of Medicine) への参加

• **2011.11.21 AM10:00 Boston Public Library (*2)/ Susan L. Glover, Stuart Walker**

- 1) 1998年に大洪水による被害を経験し、以降水濡れ資料等の復旧対策を強化
- 2) 公共図書館であることの意味を重要視し、(危険人物であっても)利用者の制限はなし
- 3) 2)により受動的な体制ではあるが、ボストン警察との連携により災害対策に配慮

PM1:30 Simmons College Library / Daphne Harrington(Director), Michele Valerie Cloonan, Sean T. Collins (Director/Chief of Police), Tucker Husband (MASCO Security Manager), Michael J. Dolan (Emmanuel College)

- 1) 小規模大学・機関、病院が密集している地区であるため、災害発生時には、各機関の得意分野の機能を供給し、互いに共有することにより、緊急対策を行う取り組み（8つのプロジェクト）を推進中
- 2) 当初訪問先のシモンズ大学図書館に周辺機関関係者が集まり、オフィシャルな意見交換を行った

PM3:30 Countway Library, Harvard Medical School / Joshua Parker, Elizabeth Eggleston, Susan Tournas

- 1) ハーバード大学は、ボストンとケンブリッジ地区に分離しているため、災害時には無事である地区が災害地区を互いに助け合うことが可能な環境にあり、大学内の連携体制が整備されている
- 2) 火事が最も危険であるが主な災害は洪水によるもの、パンデミック等へは医学部ならではの対応が可能

• **2011.11.22 AM9:30 Houghton Library of the Harvard College Library / Dennis Marnon, Caries McGinnis**

- 1) 災害時には「人命が第一」、「想定外は言い訳に過ぎない」という理念から職員と利用者がともに参加する事前連絡なしの災害訓練を実施し、常に20名のコンサベーションチーム体制
- 2) 貴重図書が地下3階分あるため、災害時における水濡れ対策用品が万全に整備
- 3) 大量の水濡れ資料が発生した場合には、フリーザトラックをチャーターする手配が整備

AM11:00 Reischauer Institute of Japanese Studies / Kazuko Sakaguchi, Andrew Gordon (Director), Ted Gilman, Eric G. Dinmore, Konrad M. Lawson

- 1) H24.1に開催予定の東日本大震災アーカイブ国際シンポジウムに係る意見交換
- 2) デジタルアーカイブ以外の出版物の収集とその利用方法について意見交換

PM2:00 Weissman Preservation Center, Harvard University Library / Jane Hedberg (Senior Preservation Program Officer), Dr. Franziska Frey, Debra Cuoco, Elizabeth A. Walters

- 1) ある程度の資料修復が可能な、各種資料に対応した本格的な設備と人員が整備
- 2) 緊急時連絡網には自宅までの距離の記載、全職員が非常用バッグとマニュアルを携帯する体制が整備
- 3) 所蔵資料へは大学で保険をかけており、1冊当たり50ドルの保険金がおける体制になっている